

被害者援助のための DV加害者更生プログラム —その実施経験から見た有効性と 公的な枠組みの必要性—

○森田展彰・筑波大学大学院医学医療系

臨床の立場から見た

日本におけるDV対策の弱点(1)

• DV加害者について

現在、日本ではDV加害者に対する法的な枠組みとしては、保護命令しかなく、これに違反した時に初めて刑事罰の対象になる。

裁判所命令による加害者プログラム実施は先進国の多くで行われているが、日本では行われていない。

結果的に男性への働きかけはほとんど何も行われず、男性の行動は変わらないまま再現されがちである。

厳罰化は必要だが、男性は収監されても社会に戻ってくる。元の被害者につきまとうか、または新たな女性との関係をもつことで繰り返しになりやすい

★保護観察の暴力防止プログラムや刑務所内でも暴力防止プログラムの作成が始まっているが、DVに対するものではなく、より全般的な暴力にたいするものである。

臨床の立場からみた 日本におけるDV対策の弱点(2)

- 被害者援助について
- 配偶者暴力相談支援センターでは、女性の相談を行い、離婚や分離を勧めて、シェルターや一時保護所で保護している。さらに母子生活支援センターなどでの生活援助は行われている。
- 分離後の、被害者やその子どもへの心理的な回復への援助は、少しづつ始まっているが、まだ十分といえない。母や子どもやあるいは母子関係のダメージの評価や回復援助がもっと行われる必要がある。
- 子どもの父親との面接交流における評価をどのように進めるか。父母の権利を平等にすること、子どものダメージの回復への配慮、これがDVの延長のような子どもを使った妻のコントロール状況を生じないようにすることが必要。

加害者の考え方の歪み 被害者の自責的な認知……修正が必要！

• 男性加害者

多くの男性が女性が悪い、女性が騒ぎすぎであると訴える。男性は女性が自分を怒らせるからやるのだという。

• 女性被害者

自分が男性を怒らせてしまったなどと自分を責めることが多い。自分のために子どもにつらい想いをさせてしまった。

• 子ども

自分が悪い子だから、こんなことが起きたのかも。とめられなかった。自分は大事にされない。

・そうした考え方の歪みが訂正されないと、女性もどってしまうことや、暴力の再発がおきてしまう。また被害母子の罪責感はその回復を阻害してしまう。

・DV加害者にはDV家庭で育ったものが少なくない。その考え方や感情の整理ををすることで世代間連鎖を防ぐ必要がある。

本邦のDV加害者対策のプロセス

- 1999年 男女間における暴力に関する調査(内閣府)
2001年 DV防止法施行
2003年 配偶者等からの暴力に関する調査(内閣府)
配偶者からの暴力の加害者更生に関する研究
カナダ・米国の視察(内閣府)
「配偶者からの暴力に関する加害者向けプログラムの満たすべき基準および実施に際しての留意事項」作成(内閣府)
2004年 DV加害者更生プログラムの試行と効果研究委嘱事業
(東京、千葉)

* 下線部: 報告者らが参加したもの



DV加害者更生に関する批判・疑念

DV被害者援助を行う立場から

- プログラムより、DV加害者に厳罰を与える司法的な取り扱いこそがまず重要である。
- 加害者に対応するより、DV被害者援助に社会資源を費やすべきである。
- DV加害更生プログラムに通っていることが、加害者の言い訳に利用されたり、被害者に加害者が変わったという過剰な期待を抱かせるのではないか？

メンズリブなどの立場から

- 男性を「加害者」扱いすることは、回復につながる。

欧米のDV加害者対策とその効果(1) プログラムによる改善

- プログラム前後で身体的暴力の発生頻度の低下が多く報告されている。

完遂後の停止率: 54%(エーデルソンら1985)

61%(シュツペラ1987)、67%(エーデルソンとグルンズ,1989)

I その他の心理行動的側面の改善

暴力、支配、飲酒、薬物、ストレス対処の改善(ハッセルら,2003)

社会的援助、自尊心、ストレス、結婚や家族への態度、ローカス・オブ・コントロール、婚姻関係、感情表出、コミュニケーションの改善(テュッティーら,2001)

欧米のDV加害者対策とその効果(2) プログラムのみでの限界

- 心理的(言語的)暴力への有効性は不明確
身体的虐待が減少後も、言語的な虐待が4割前後が持続。
(エーデルソンとグルンスキー, 1989)
心理的虐待は減った12%, 変化なし46%, 42%は悪くなった
(リトミスター, 1993)
参加回数が多い者や完遂者では減少(ラッセルら, 1997など)
- 脱落者が多い。
司法機関が命じた者の半数前後の脱落。(ゴンドルフ, 2000等)
- 有効性の限界の指摘
短期での改善はあてにならない。
身体的暴力が減っても被害者の脅威は減少しない。

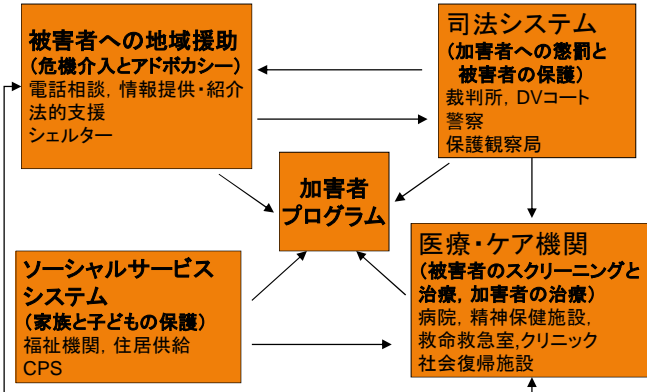
欧米で使われている被害者を守る体制

- 欧米では、加害者プログラムの継続や効果を補強し、被害者の安全を確実に守るため、コミュニティ中の被害者援助機関や司法機関などの複数の機関が連携する体制=「統合された共同体応答Coordinated community response (CCR)」と呼ぶ。
- CCRの先駆的試みは、1980年代のドゥルースモデルにおける家族内虐待介入プログラムである。
- CCRは米国における9割の州でCCRが必要であることが言及されている。その他にカナダやオーストラリアなどでも取り入れられている。

海外で加害者プログラムが行われている現状とその理由

- 欧米、アジアの多くの国で公的枠組みのもとに施行。
- 加害者プログラムを提供している団体の多くが、もともと被害者援助を行ってきた人々が開設に関わっている。

「当初は加害者に対処することへの嫌悪や資源活用として意味がないと感じていたが、ここ10年ほどで考えが変わってきた。」という。その理由としては、
①被害者の援助のみをやっても加害行為やそれによる被害者の死が減らなかったこと。
②同居を続ける夫婦も多く、分離の手法だけでは限界があると感じること、
③厳罰化してもまた社会に戻ってきて、同様の行為を継続する人が多いこと。



CCRのモデル

全ての関係機関が加害者に自己責任を持たせ、同一のメッセージを送り続けることにより、加害者の行動の変化を促す。

加害者プログラムの目的 (Benett & Williams, 2001)

- 加害責任の自覚
- 加害者の認知・行動の変容
- 被害者の安全確保

☆直接に働きかける相手は、加害者でありながら、「真の」クライアントは、被害者であるという特殊な構造。

* 加害者プログラムの有効性と注意点

- 有効性が無作為対照試験で確かめられている。
- 心理的虐待への有効性の証明は不十分。
- 加害責任を明確にしない手法(カップルカウンセリング、自助グループ方式、怒り管理訓練の単独使用)はかえって危険性を招く可能性がある。

NPO法人Respectful Relationships Program研究会 (RRP研究会) Hpより

H16年度に内閣府の委嘱事業として東京都が試行した「DV加害者更生プログラム」の開発・実践に関わった臨床家を中心として立ち上げられました。東京都のプログラム終了後は、当研究会主催として、プログラムの継続・発展、および関連領域の研究を進めており、2007年12月にNPO法人として認証されました。

<主な事業>

- DVと虐待の包括的支援
 - DV被害者である母親とその子どものためのプログラムの開催
 - DV加害者に対する教育プログラム
 - DV加害者に関する調査・研究事業: 上記プログラム実施の結果をもとにした研究会の開催

DV教育プログラムについて ~HPより

本プログラムの目的

- 本プログラムは **被害者支援の一環** であり、被害者の安全を最も重視しています。
- 参加者の方が **暴力を用いず敬意をもって** パートナーと接することが可能になることをめざします。
- そのために、**よいコミュニケーションを行う方法や技術** を身につけることが重要です。プログラムは、これらについて学び、暴力でない新たな方法を自ら実践するためのものです。
- 日程: 毎週月曜日 全12回(1クール)
- 時間: 19:00~21:00(2時間)
- 場所: 民間のカウンセリング機関のミーティングルーム
- 費用: 36,000円
- 形式: 小グループ(4-8人)、クロースド・グループ。
- ファシリテーター: 男女ペア

参加者・参加状況

<10クール時点での集計>

- 参加者: 40名, 延べ80名(各回平均8.0名)
- 反復参加 5回: 1名, 4回: 3名, 3回: 11名, 2回: 5名
- 中途での脱落率: 2名/80名 = 2.5%
- 年齢: 30代: 5割 > 50代以上: 2割 > 20代: 40代
- 職業: 公務員、会社員、自営業、NPO職員等
- 同居: 同居: 3割(途中から再同居含む), 別居: 7割
- 保護命令: 5名

⇒ 現在は19クール目、参加者79名

プログラムの各回のテーマ

インテークと契約のセッション

第1回: 暴力とは？

第2回: 認知行動モデル(ABCDモデル)による暴力の理解

第3回: 暴力につながる信念Bについて

第4回: 自分の感情Cと感情表現Dについて

第5回: 暴力の影響1(パートナーに対する)

第6回: 暴力の影響2(子どもに対する)

第7回: 自分の暴力に対する責任

第8回: 健康なコミュニケーションを学ぶ—アサーティブ

第9, 10回: ロールプレイを用い、各自にとって問題となる場面の自分や被害者の考え—感情—行動を変える練習をする。

第11回: 被害女性の視点からの自分の暴力の見直し

第12回: 再発予防計画

ふりかえりセッション

介入の要素

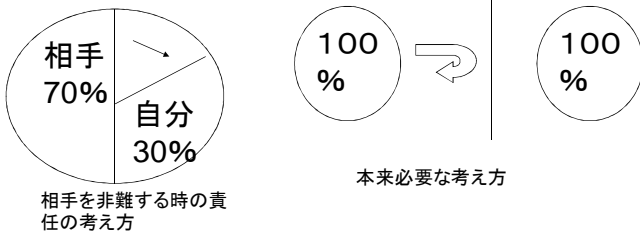
1. 加害責任の自覚
2. 動機付け
3. 認知—感情—行動モデルによる分析・修正
4. スキル訓練
5. 子どもとの関係
6. 被害者の安全性への対応

(1) 加害者責任の自覚と取り組む動機付け(働きかけ)

- 暴力の定義と種類、暴力の輪と平等の輪
- 「暴力は選択」であり、責任は100%加害者にあること。
「責任のパイ」のワーク。
- ☆ 心理的暴力の否認、矮小化、責任転嫁への介入
- 暴力が与える影響の説明(重篤性、長期性)
被害を受ける側の気持ちを感じさせるワーク
「茂みのざわめきによる恐怖」の例え話、トラウマの影響
「よい上司・悪い上司」部下の視点で支配の影響性を考える
ビデオで被害者の気持ちを推測
ロールプレイで被害者役をさせる
- 責任の取り方を示すことでの動機付け
説明責任、賠償責任、再発防止責任



責任のパイ



各自が自分の行動について100%責任をもつ。相手は完璧ではない100%でないかもしれない、では自分は相手の出方次第で反応するので良いのか？そういうやり方をしたいですか？
相手がどうであれ、暴力を使ったということについては100%皆さんに責任がある。自分のパイを見るプログラム、だから変えられることを扱う。暴力は行動だから変えられる。

「茂み」のたとえ話

- あなたの娘がある日、道を歩いているとします。彼女が茂みのところを通ったとき、茂みの奥から男が飛び出して来て、暴力的な行為をしました。娘さんはなんと感じたでしょう？
- 娘さんが家まで走って逃げてきて、あなたにそのことを話しました。あなたは どうしますか？
- 娘さんがその晩に突然そのことを思い出して怯えたり、悪夢にうなされたりしたら、親としてどのようなことをしますか？
- この出来事によって、娘さんにはどのような影響が續くと考えますか？
- ある日、娘さんが、その道を歩いてみることにしました。娘さんが被害を受けた場所を通った時、風が吹いて茂みががさがと揺れました。その時、彼女はどんな状態になるでしょう？

☆異なる立場から、暴力の影響の深刻さと回復にかかる長い時間がかんがえさせる。

「加害者責任の自覚」の働きかけに関して 実践でみられた反応

- 当初、暴力の否認、矮小化、責任転嫁が多くみられた。
例: 自分の暴力には理由があり、相手にも落ち度がある。
自分に悪意はない。
⇒ワーク等で、パートナーに与えた影響から暴力を考えさせることで、次第に自分の暴力を認められるようになる。
- ⇒意図がなかったことや自分の正当性を述べても、パートナーとの関係が戻らないことを示す中で、自分を変えることを次第に納得する者が増えた。
- ピアの効果が率直性や動機付けを促進した。
- 「犯罪者」として扱われることへの反発
⇒プログラムで、スタッフとも率直に話し合せてこそ、尊重しあう関係を学べるということを伝える

(2) 行動変容の動機付け

- 動機付け面接の手法
- Compassionateな態度 (Stefanakis, H.)
p 当人のおかれた状況の中で行動変容を促すことができる動機に焦点をあてる。
p 加害行動の責任を明示する一方、これを変えようとする取り組む参加者に人間としての尊重を示す。自分のネガティブな側面を受け止める姿勢については後押しする。
p 相手の視点からみて、支配的な方法を用いるに至ってきた心理をたどり、同じやり方でない方法を見出す責任と力があることを加害者に示す。

暴力をもたらす結果のバランスシートをつくる

	良い点	悪い点
暴力的な方法が続けた場合	<ul style="list-style-type: none"> ・いらいらが一瞬すっきりする ・力があると思える 	<ul style="list-style-type: none"> ・またつかまってしまう ・孤立する ・長く勤められない ・子どもに悪い影響がでてしまう。 ・自己嫌悪
暴力的な方法を変えた場合	<ul style="list-style-type: none"> ・ながく勤められる ・家族とも離れなくて済む ・自信がでてる 	<ul style="list-style-type: none"> ・いらいらがたまってしまうかもしれない ・なめられる

(3) 加害者の認知行動の変容(働きかけ)

- 認知行動療法(ABC理論)の利用とスキル獲得

A(Action) = 出来事
 B(Belief) = 信念
 C(Consequence) = 感情
 D(decision) = 行動
 E(effect) = パートナーへの影響・効果

- ビデオ場面の分析
- 自分の暴力場面の分析
- 暴力につながるB⇒新Bの導入・セルフトーク
 独善的でなく、相手の気持ちが変わるE(効果)を持つこと
- スキル訓練、怒りの感情BがあってもDは選択できる
 怒りを押さえるのではなく、アサーティブに伝える工夫

認知—感情—行動の見直し

A: 出来事	B: 考え	C: 感情	E: 影響
サンマが十分に調理されていないかった	<自動思考> 「夫として、ないがしろにされた」 <信念> 「妻であれば、完璧に家事をこなすべき」「夫の尊厳を傷つけられたら、妻を傷つけてもいい」	怒り: 100% D: 行動 どなって、妻の人格を否定した。子どもにも妻の悪口をいった。	(妻)恐怖・不安、自己否定的になる。(子ども)恐怖、混乱 最終的に、妻が突然出ていった。

考えBをみなおして、別のB'へ変える
 →「妻は調理をちゃんとすべき」という考えは当然だ。自分は正しい
 ……自分の正しさへのこだわり

→「家事が完全にできない時もある」「自分の思いどおりにならないからといって相手を傷つけるのはおかしい」
 ……「関係性の信念」を変える

Bが変わると感情C、行動 Dはどうなるか
 →感情: 怒りが25%くらいになるかな
 →「ちゃんと焼いてくれよ。」とどならず普通につたえる。

加害者の行動変容(プログラムへの反応)

- 自分の認知・感情・行動を分類する作業にとまどいがあつたが、次第に興味を持って取り組む人が増えた。
- Bにおける『関係性の認知の歪み』は自覚しにくい
 例: 「相手の浪費癖は直すべき」という信念Bに元づき罵倒した。この信念は間違っていないはずだ。
 ⇒「事柄の信念」でなく、「関係性の信念」「隠れ信念」に気がつくことを促す。
- 知的理解に止まる場合、体験的ワークが必要であった。
 ⇒ロールプレイやビデオでやりとりを再現し、それをABC理論で見直したり、新しいやり方が本当に相手に伝わるかどうかを試す。

再発防止のワーク①

「もう大丈夫」という自分A
 「まだ危ない」という自分Bの間のロールプレイ
<場面1> Aの役=参加者、Bの役=ファシ
Aの役(参加者):ここに通う前とはかわってきた、責任の話は納得できたし、その考えをもとにしてやっていけば今後は暴力ないと思う
Bの役(ファシ):まだ、古い考えが顔を出す、自分が気付かないときに、油断してしまうことはあるのじゃない?
Aの役(参加者):不満をためないで、その時の気持ちをアイメッセージでできるだけ伝えるようにしている。
Bの役(ファシ):Pは納得してくれるのかな?
Aの役(参加者):最終的に暴力的かどうか判断するのはパートナーがどう感じるかだと思う。あきらめずに続けていって。ダメなことはPにつたえてもらう。今は、ずっとプログラム続けてくれてうれしいといわれ、自分を変えるモチベーションになっている

再発防止のワーク②

「もう大丈夫」という自分A
 「まだ危ない」という自分Bの間のロールプレイ
<場面2> Aの役=ファシ、Bの役=参加者
Aの役(ファシ):自分の考えや感情をわかって、伝えていけば大丈夫。
Bの役(参加者):頭でわかっていても、意見が違ったら感情が出るでしょう。表情にでるし、それによって相手を支配することになる
Aの役(ファシ):それが続いたら、暴力だけど、そういう結果になったときもわかるようになってきたから、パートナーも完備な人間じゃないし、フォローするし、きっとそれを続けていく
Bの役(参加者):わかるっていうけど、何クール通っても大丈夫という自信が油断になる
Aの役(ファシ):そこで完璧主義になるとかえて危ない、プログラムに通い続ける中でアンテナをはることを続けていけばいいと思う。細かい失敗を重ねていく中でだんだんわかるようになっていく
Bの役(参加者):完璧を求めるわけじゃないけど、自分は大丈夫という態度が気に入らない。

「認知—感情—行動変容」に関する実践結果

- 認知・感情・行動を分類する作業に当初はとまどいがあるが、次第に興味を持って取り組む人が増えた。
- 『関係性の認知の歪み』は自覚しにくい、次第に「自分の思い通りであるべきだ」「女性が男性に合わせるのは当然だ」「自分が正しいから相手に暴力的な言葉や行動をしてもよい」などの考えの歪みをわかるようになる人もでてきた。
- 一見怒りを抑えきれず起きているように見えても、女性が自分を軽んじるなどのきっかけを探して、これを理由に問い詰め、激高することを計画的に行っている場合が多く認められた。

⇒あくまで自尊感情を守ることから離れられない人の場合、ある程度の知的な理解ができて、我慢が続くと、受動攻撃的になることがみられた。このタイプに気づかせていく方法が課題であった。

⇒被害者の視点から自分の認知の歪みに気付いて、大きく変わる人もいた。こうした変化には2、3クール続ける必要があり、モチベーションの継続が重要であった。

(4) スキル訓練

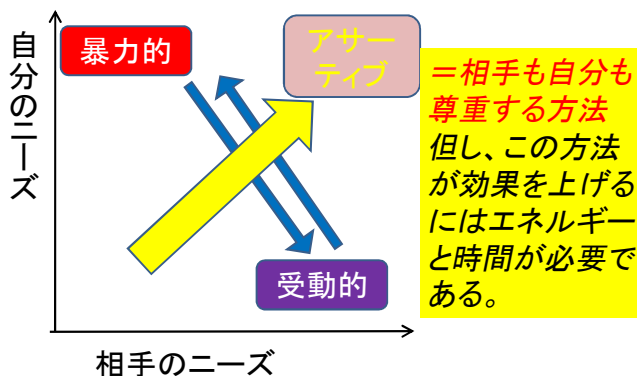
- 1 危ない方法を抑制するのみではなく関係性を育むスキルの獲得へ(アサーティブネスのスキル、フェアな問題解決の手法)
- 1 独善的でなく、相手の気持ちが変わるE(効果)を持つことを確認する。
- 1 相手や自分の気持ちを読みとる力を高める必要性(インサイトフルネス等)
- 1 ロールプレイなどによる体験的学習を通じ自分のコミュニケーションのパターンやそのもとにある認知・感情を振り返る。

ロールプレイを用いた認知・スキルを自覚と変化の促進

- ロールプレイ1: 暴力的なやり方のまま
パートナー役: ファシリテーター ↔ 加害男性役: 男性本人
- ロールプレイ2: 暴力的なやり方のまま
パートナー役: 本人 ↔ 加害男性役: 男性本人
- ロールプレイ3: アサーティブなやり方
パートナー役: ファシリテーター ↔ 加害男性役: 男性本人

- ρ 再現していくと、強い怒り、支配的態度が出てくる場合が多い一方、役割逆転では恐怖を感じるようである。
- ρ 短い時間でロールを変えることで認知やスキルをメタな視点からある程度ふりかえられる。自分の正しさへのこだわりよりもコミュニケーションスタイルやそのもとにある認知に目がいく。
- ρ 暴力をやめるとなると、ノンアサーティブになりがちであるが、自分の気持ちを表現しながらも暴力的でないやり方があり得ることを実感し、これが関係性の認知を再検討する材料になっている。
- ρ 参加者同士のフィードバックの有用性

コミュニケーションスキル (アサーティブな方法の必要性)



「スキル訓練」に関する実践の結果

- 知的理解に止まる場合、体験的ワークが必要であった。
- やってみてはじめて、体験的に自分の問題に気づくことが多い。
- 単なる怒りの抑制では無理であることへの自覚がでてきた。

(6) 被害者の安全への働きかけ

- 被害者に対するプログラムの説明会を1クール中に1, 2回施行(プログラムの趣旨は伝えるが、細かいやり取りは伝えない)。
- プログラム中の加害者・被害者の状況について、被害者の援助者と連絡をとり、可能な範囲でフォローした。
- プログラム中に、暴力の再燃が生じる可能性があれば、守秘性を超えて被害者への連絡をとること、プログラム中止の可能性のあることを最初に確認し、危険な場合個人面接などで仕切り直しを行った。

「被害者の安全」に関する実践結果

- 被害者の安全感がすぐに高まらない場合もあったが、全体としてプログラム継続は安全感を支える効果があることが被害女性の感想より明確であった。
- 説明会で、教育の内容、行動変容の働きかけを知らせていくことは、意味が大きい。夫の変化への過剰な期待やスタッフに自分の代わりに懲らしめることを期待するような場合への修正的な働きかけが必要な場合もあった。

⇒プログラム中の危険への退所の困難性。被害者支援との連携・相互理解がもっと必要。

⇒司法的枠組み(保護命令など)との連携の必要性。もあり、参加モチベーションの継続やフォローアップは今後の課題。

⇒同居や保護命令解除を契機に終了する場合

欧米で使われている被害者を守る体制

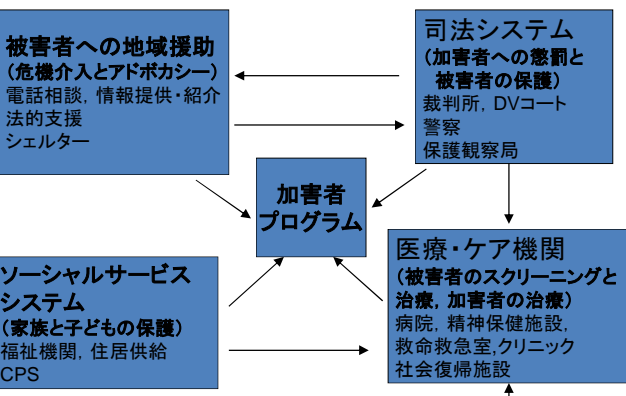
- 欧米では、加害者プログラムの継続や効果を補強し、被害者の安全を確実に守るため、コミュニティ中の被害者援助機関や司法機関などの複数の機関が連携する体制=「統合された共同体応答Coordinated community response (CCR)」と呼ぶ。
- CCRの先駆的試みは、1980年代のドールズモデルにおける家族内虐待介入プログラムである。
- CCRは米国における9割の州でCCRが必要であることが言及されている。その他にカナダやオーストラリアなどでも取り入れられている。

有効性の検証

対象: プログラムを施行した。2010年から2012年にかけて行った4クール(1クール12週間)のプログラム参加者に対して、調査協力をお願いした。協力の得られた21名の方のアンケートを行った。このうち前後のアンケート両方を記入できていたのは15名で、これについて主に解析を行った。

調査内容: 開始直前、直後に、以下の内容の質問紙を施行した。

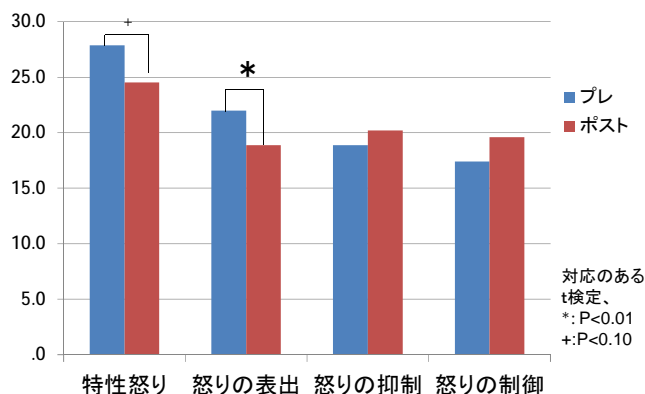
- STAXI2(State-Trait Anger Expression Inventory-2) 怒りの量と表出の状態・特性を測定する尺度。今回は、STAXI2をパートナーとの関係の場面で感じる怒りについて評価させた。
- POMS(Profile of Mood Scale)
- 暴力やその防止への理解に関する質問票
- プログラムの満足度、有用性
- その他プログラムに関する感想や自分と相手が変わったと思う点、変わらないと思う点



CCRのモデル

全ての関係機関が加害者に自己責任を持たせ、同一のメッセージを送り続けることにより、加害者の行動の変化を促す。

STAXI 2(State-Trait Anger Expression Inventory-2)の結果 (パートナーという場面の評価)



暴力行動やその認識

- 「パートナーのことをさげすむことなく、受け止める聞き方ができる」の得点が、有意な低下を示した(Wilcoxonの符号付順位和検定、 $P<0.05$)。
- 「パートナーに腹が立っても、相手の気持ちを尊重した方法でつたえることができる」「質問攻めや論破で追い詰める」の得点で有意傾向の低下を示した(Wilcoxonの符号付順位和検定、 $P<0.10$)。
- それ以外の質問紙の得点では有意な変化はなかった。暴力行動はもともとやっていた暴力を認識するようになり、増える面もあり、減少とも相殺されるためと考えられた。

感想「プログラムで変わったこと」①

- TVや小説、映画でDV場面があると嫌悪感、恐怖感をもつようになった。2度と自分は暴力をふるいたくなく強く思った。
- 自己の対応・方法を学ぶことができたので、怒り等の感情を暴力的な行動で表すのではなく、相手に対して感情を伝える手段方法などで変化させることができたこと。
- 冷静になれるようになった。
- 他の参加者の方の考え方、意見がとても参考になった。ロールプレイを通じて、私は妻役だったが、妻の立場が分かった。
- 「～すべき」という考えがなくなった。視点を変えたり、一呼吸おいてイライラすることを回避できるようになった。

感想「プログラムで変わったこと」②

- 自分の気持ちを無理のない程度にパートナーに伝えられるようになった。
- 相手への影響を尊重し、考え方や感情を変化させる努力した。
- 自分の感情に任せて行動しなくなった。
- 自分の気持ちを少しは伝えるようになった。
- 怒り等の感情を暴力的な行動で表すのではなく、相手に対して感情を伝える方法を変化させることができたこと。
- ロールプレイで妻役をして妻の立場が分かった。

「プログラムを受ける中で変えることが難しいと感じたこと」

- 気分の上下してしまうことを止めること
- アイメッセージがうまくできない。瞬間的に相手をうちまかせてやろうとおもってしまうところがある。
- 暴力的な部分をゼロにしたために、本来自分が持つよい意味での意欲競争心までゼロになってしまった。
- より実践的なノウハウを身に付けられるようにしたい。
- 全てのことで加害者がわるかったと考えることはできなかった。
- いらいらするところ自体は残っている。
- プログラムのクールの合間に、元の考えにもどりそうになることがあった。

有効性のまとめ

- ① 10クールでの脱落率は5%以下で、任意参加者でも、加害責任を明示と、変化の動機付けの両立は十分可能であると思われた。
- ② 加害責任の自覚やABCモデルを用いた行動変容については、「関係性の歪み」の無自覚や知性化等の問題があったが、体験的なワークを加味することで、ある程度有効であることが確認された。グループでの相互作用は否認を解くのに有効であった。
- ③ アンケート調査では、怒りの表出の低下、相手のいうことを聞いたり尊重する態度が増える結果がみられた。暴力が完全になくなるというよりも暴力の自覚や、自分の感情や相手への影響を考えるようになる態度がでてくるということが成果と思われた。
- ④ 被害者の安全性について、法的な枠組みがない中でも、被害者援助機関との連携や被害者への説明会などによりフォローした。プログラム継続事態がある程度被害者の安全感を支える効果を持つことを確かめた。しかし、今後海外で行っているような、被害者援助と司法機関との強い連携体制を工夫する必要を感じた。